

院長あいさつ

—最高の病院を目指して

平成 28 年 4 月  
院長 片岡慶正

今年も多くの志豊かなスタッフを新たにお迎えして、新年度をスタートしました。本院から 12 名の 1 年目研修医が新たな医師としての第一歩を踏み出し、加えて 17 名の新任医師を併せて常勤医師は昨年度よりも 7 名増の計 143 名体制となりました。病院フロントラインの医療事務の全面リフレッシュに伴い、“新たな病院の顔”が地域の皆様をお迎えします。患者様の笑顔は“医療現場の光”ですが、若手医療スタッフの笑顔は“医療現場の希望”です。やはり“ヒトは宝”です。今年も職員一丸となって地域に最適な医療を提供させていただきます。

“だれもが安心して住み続けられるまちづくり”になくってはならない病院として

『市民とともにある健康・医療拠点』を目指す病院の姿として策定しました病院経営計画も第 2 ステージ 2 年目に入りました。当院も参加する地域におけるドクターカーの本格運用とともに“救急ノンストップ病院”として、市民の皆様はじめ地域ニーズに応じて、だれもがいつでも安心して住み続けられるまちづくりに貢献することは職員一同の喜びとするところです。

高度先進医療機器の導入はじめ医療スタッフ陣容も着実に整い、“がんに一層対応できる病院”としての陣容も大きく飛躍しました。当院は低侵襲で患者に優しい手術としての鏡視下手術（消化器内科および外科、呼吸器外科、泌尿器科、婦人科領域すべて）を得意としていますが、なかでも内視鏡的手術支援ロボット『ダビンチ』による前立腺手術では多くの患者様にその優れた成果を実感していただいております。昨年 3 月から開始した県内初の『ダビンチ』による胃がん手術症例も 1 年以内で 20 例を超え、国への先進医療申請段階で、関西地域のトップランナーとして歩んでいます。最新鋭のリニアックによる放射線治療も順調に症例を重ね年間新規症例 100 例超え達成とともに確実な治療成績を上げています。昨年 11 月から化学療法部と外来通院手術部を琵琶湖眺望の素晴らしい 6 階移転～拡充に努めています。健診センターでの早期発見から、内視鏡および外科的手術治療、化学療法、放射線治療そして緩和ケアに至るまで、すべてのステージのすべてのがん診療にシームレスで集学的な診断～治療体制を今後も自信を持って提供させていただきます。

本年も第 3 者評価（日本医療機能評価機構、卒後臨床研修評価機構、ISO9001 国際標準化機構）の継続認証に加えて日本病院会 QI（Quality Indicator）プロジェクトへの参加により、医療の質・安全の透明性と常なる向上に努めてまいります。最先端の安心・安全な医療提供体制が日々進化する様をお知らせ出来ることは、地域の皆様のご支援のおかげであり、あらためて感謝申し上げます。

## 重要事項のお知らせ—病院としての“決意と覚悟”

本年3月28日市議会の議決をもって当院の地方独立行政法人（独法化）への方向性と病床数変更が決定されました。すなわち、地方独立行政法人市立大津市民病院に向けての準備が本格稼働します。結核病棟10床廃止、神経難病病棟30床から20床への変更、一般病床数41床削減に伴い、計506床から445床へスリム化します。一方では、本年度から救急および高度医療への対応強化を目指したICU拡大に向けて動きます。

新年HPあいさつでも述べさせていただきましたが、医療における国民の責務が十分に浸透しない中、患者も医療者も自己変容が必要な時代に入った感が強い。わが国は世界に類を見ない長寿社会を迎えたが、2025年問題での超高齢社会における医療・介護の最適化を求めて、今やまさに地域医療構想、地域包括ケアシステムが急ピッチで構築されようとしています。超高齢社会突入の中、地域における医療機能の分化、強化、連携の推進およびその動向と連動した新たな平成28年度診療報酬改定は、自主的対応が求められる全国すべての病院の経営にとって本当に厳しい内容です。その対応を先送りすれば、自動的に経営破綻が誘導される危険性が見え隠れします。『変化に対応できるものだけが生き残る』—まさに進化論が病院の将来ビジョンを規定する時代となった感です。

今後も、患者ニーズと地域ニーズに応えるとともに、地域とともにある市民病院の立ち位置の再認識を強め、病院の生き残りをかけて、職員一同“強い決意と覚悟”で邁進してまいります。

## 対治と同治の医療融合—最高の病院を目指す価値観の共有

『医療は患者のニーズに応えてはじめて、その輝きを増し、その価値が発揮される』といわれています。患者ニーズに応えると言うは易くも、個々の場面では大変難しいのが現実です。

われわれは西洋医学を基盤に学んできました。しかし、われわれ日本人は古来、東洋的精神に共鳴する“心の遺伝子”を育んできました。仏教語に同治と対治という教えがあり、われわれ医療者に多くを語りかける学びの言葉・考え方です。例えば、風邪引きでの発熱に対して氷で冷やして熱を下げようとするのが「対治」で、温かく汗を充分にかかせて熱を下げるのが「同治」です。悲しんでいる人に、「悲しんでばかりではダメじゃないか。もっと元気を出せ」と悲しみから立ち直らせようとするのが「対治」で、「辛いだろうね。よく分かるよ」とともに悲しみを分かち合い、相手の心の重荷を下ろしてあげようとするのが「同治」です。「対治」は病に対して薬や手術でこれを治そうとする行為で、医者による治療はこの典型で、西洋医学の考えです。対治が現状を否定するのに対して、「同治」は現状を肯定するところから出発します。同治は病を受け入れて“あるがまま”を容認する東洋医学的考えです。末期癌の患者をみとる場合、最後はこの同治によるしか道がない。対治と同治は身体の治療に限らず、私たちの心の治療にもあてはまるように思います。

患者ニーズの根底が、一人ひとりの“納得の医療”であるならば、医療者には対治と同治を統合的に包括した智慧の実践が求められます。今年度は、職員一同、みんなで『最高の病院を目指して、最高の価値を見出して、価値観をみんなで共有する』ことを合い言葉としました。“個人として、組織として、患者目線に立って、出来ること、しなければならないことを探し、そして、する”という観点です。“プロの医療人として出来ること、最高の病院としてしなければならないことをする”行動目標の下、職員一同、医療に身を投じた原点に立ち戻り、病めるヒトの心を中心においた視点でプロアクティブに日々の診療に携わりたいものです。

## 結びに

一人でも多くの皆さんのお役に立てるように、さらなるバージョンアップを行います。病院ビジョンとしての“市民とともにある健康・医療拠点”のさらなる進化に努めてまいります。“ヒトは宝”を具現化する最高の病院を目指します。

これまで皆さんと一緒に準備してきたこと、整備してきたことを本格的にフル稼働する年度にします。皆様とともに歩む市民病院にご期待いただければ幸いです。

本年度のキーワード：みんなで、“最高の病院”を目指します

## 平成 28 年度初めにおける院長卓話

最高の病院を目指す価値観の共有—職員みんなで認識と共有する

みんなで、『最高の病院を目指しましょう』

みんなで、『最高の価値を見出しましょう』

みんなで、『価値観を共有しましょう』

院長からの4つのお願い

- (1) 『自分のアンテナ感度を高める』
- (2) 『プロだからこそ笑顔』
- (3) 『失敗からの学びを大切に』
- (4) 『病院を楽しむ』

プロの医療人は「反省的实践家 reflective practitioner」＋「技術的熟達者 technical expert」

“学びの心と楽しむ心”があつてこそ、プロとしての持続がある。